



Title	社会的生活過程としての生活世界
Author(s)	岩佐, 茂
Citation	一橋論叢, 97(5): 623-639
Issue Date	1987-05-01
Type	Departmental Bulletin Paper
Text Version	publisher
URL	http://doi.org/10.15057/12708
Right	

社会的な生活過程としての生活世界

一 問題としての「生活世界」

今日、個人がそのなかで生きる生活世界の問題がリアリティをもった問題として論議されるのも、個人を私的領域に閉じ込めるためではなく、個人を私的領域から解放し、個人と社会との通路を見出そうとするためであると思われる。個人の生活世界は、当の個人にとってリアリティをもった世界であるとともに、かれだけの閉ざされた世界ではありえない。それは、諸々の事物や他の諸個人との交わりをぬきにしては成立しえない世界だからである。それゆえ、一見、個人の私的領域と思われるがちな生活世界のうちに他の諸個人や社会との通路を見出すことは、生活世界の問題を考察していくうえで、重要な

課題であるといえよう。

「生活世界」の概念を提起したフッサールやシュッツは、まずもって、生活世界を個人の日常的な生活の場として捉えているが、生活世界が個人の日常的な生活の世界をはなれて存立しえないことは、誰しもが認めるところであろう。問題は、個人の日常的な生活、あるいは日常生活の場としての生活世界をどのように理解するのかという点にある。

その場合、まず、日常的な生活は、諸個人の生活の再生産過程として規定できるであろう。⁽¹⁾ その点では、日常的な生活は、労働・食事・睡眠など、日々繰り返される生活活動の反復性によって特徴づけられる。しかし、ハイデッガーは、このような反復性を「世界内存在」としての現

岩 佐 茂

存在の惰性態とみなし、日常的生活における惰性的な非本来的自己を超出したところに、本来的な自己の自覚が成立すると考えた。ここでは、日常性と非日常性とがまったく隔絶したものと捉えられている。しかし、非日常性は、日常性から隔絶した彼岸においてのみ成立するものであるのだろうか。日常的生活の反復性がたんなる単調な繰り返しではなく、かえってそれは、リズムをもち、新しいものの生起、新しいものとの遭遇をかならず伴うものであり、また、祝日や祭日をも包み込むものであるとすれば、非日常性は、日常的生活のうちにはないだろう。しながらも、それを超出したものであるのではないだろうか。

新しいものの創造が非日常性の部類に属するとしても、それは日常的生活と別の次元ではなく、日常的生活のうちでおこなわれる。リズムをもった日常的生活の反復性のうちで、「人間は、自分の生活を日々新しくつくるのである」⁽²⁾。歴史的变化や発展も、日常的生活の彼岸においてではなく、日常的な生活世界のうちで形成されるものといえよう。人民が歴史をつくりといわれる場合、それはまずもって、人々の生活をとおして、そのなかで、

歴史が形成されるということを含意しているのである。

新しいものの創造、歴史の形成が日常的生活をとおして (durch) あるいはそれとともに (mit)、日常的生活のなかで (in) おこなわれうるものであるとすれば、日常的生活を批判の対象としてのみ考察することは適切ではないであろう。あるいは、日常的生活に伴う意識である日常の意識を、理論的意識に揚棄されるべき意識としてのみ取り扱うことも正しくないであろう。⁽³⁾ ベーコンが、イドラ批判によって日常の意識の否定的側面を剔出したことは少なからぬ意義をもつものではあるけれども、日常の意識の否定的側面とともに、その肯定的側面もまた照射されて然るべきであろう。マルクスは、資本主義社会における物象化された日常の意識を「日常の宗教」⁽⁴⁾として特徴づけたが、しかし、日常の意識の全体を物象化された意識として捉えていたわけではない。日常的生活や日常の意識の肯定的意義を含め、それらをトータルに捉えることこそが必要であると思われるが、この問題は、「生活世界」の概念把握の問題と不可分にかかわってこよう。

ところで、生活世界の問題は、『ヨーロッパの学問の

危機と超越論的現象学』(以下、『危機』)における後期フッサールや、かれの影響を受けたシュッツ、メルロ・ポンティが論じているだけではない。「生活世界」という概念こそ用いてはいないけれども、すでに、マルクスの思想が生活世界と深くかかわっている。そのために、生活世界を論じるなかで、マルクス主義と現象学とを結びつけようとする試みがおこなわれたりすることにもなる⁽⁶⁾。しかし、生活世界の問題にたいするマルクス主義的アプローチと現象学的アプローチとは思想的にかなり異質であり、それゆえ、両者を安易に接木しても、実りある成果をもたらすようには思われない⁽⁷⁾。

二 フッサールの生活世界

フッサールは、われわれが目覚めて生きている世界を「生活世界 (Lebenswelt)」と呼んだ。かれの言う「生活世界」の概念には多義的な意味合いがつきまとい⁽⁸⁾ており、かならずしも一義的には確定しにくいところもあるが、かれがこの概念でもって、自我が他者と同じように知覚し、評価し、行為する「日常的な生活の環境世界 (Lebensunwelt)」⁽⁹⁾を、「生活世界として表象していたこ

とは確かである。

しかし、フッサールは、生活世界を、自然的・社会的・文化的諸条件との連関において具体的に解明するということをしていない。『危機』では、生活世界の固有の存在様式を捉える「生活世界の存在論」⁽¹⁰⁾という課題は提起されてはいるが、展開されてはいない。そこでフッサールがおこなっているのは、生活世界のなかで目覚めて生きているわれわれの意識の態度——それを、かれは「意識生活 (Bewusstseinsleben)」と呼ぶのであるが——の超越論的反省にとどまっている。

フッサールによれば、生活世界における意識の有様を特徴づけるものは、眼前に見出される世界を自明なものとして受け入れる意識の自然的態度であった。生活世界においては、意識は、日常的な生活のなかで知覚経験する諸々の事物や他者⁽¹¹⁾を自明なものとして、その存在を疑うことをしないのである。

このように意識が自然的態度をとる生活世界を、フッサールは、学的世界との対比において、学以前の (vorwissenschaftlich) 世界として特徴づけた。学的世界が客観的・普遍的世界であるのたいして、学以前の生活

世界においては、事物が主観的・相対的に現われることを特徴とする。学的世界は学以前の生活世界から出発しながらも、それを超えた世界として理論的・論理的構築物であり、知覚されえないのにたいして、生活世界は、知覚経験される世界として「根源的明証性の領域」であり、客観的・普遍的学問を「根拠づける地盤」であるといわれる。

フッサールにいわせれば、ヨーロッパにおける学問の危機も、学問がその拠ってたつ生活世界との意味的連関を見失ったからであった。学問が純粹にそれとして自己を展開するものではなく、生活世界との連関のなかで発展するものであるということはいまでもない。そのかぎり、生活世界が学問を「根拠づける地盤」であるというフッサールの言明は真実である。しかしながら、学問の客観性・普遍性が学以前の生活世界の主観性・相対性のうちにその根をもつというのはアポリアではないだろうか。あるいは、事物が主観的・相対的に現われる生活世界を、学的に捉えようとするのもまたアポリアではないだろうか。フッサール自身このアポリアを感じていたからこそ、⁽¹⁵⁾学的世界の客観性・普遍性とは根本的に

異なった生活世界のアプリア、普遍的構造を「発見」するために、かれは客観的学問にたいする判断停止（エポケー）をおこなない、意識の自然的態度の超越論的還元をおこなったのである。その結果かれが「発見」したのは、生活世界においても、その世界は超越論的意識との相関関係のうちにあり、それゆえ、事物や他者は世界地平（*Welthorizont*）のうちで存在意味と存在妥当性をもつて存立しているということ、この相関関係が生活世界のアプリアな普遍的構造をなしているということであった。

したがって、フッサールの生活世界論は、かれ自身の現象学的立場を超え出るものではなく、どこまでも現象学的立場からの生活世界へのアプローチを試みたものにほかならないのである。⁽¹⁶⁾

フッサールの現象学が、個人的意識の枠内にとどまる超越論的自我との相関関係のうちで世界を捉えようとするものであるかぎり、世界は、超越論的自我を中核として開示される世界地平として現われうる。世界地平は地平として、中核と限界とを有するとともに、中核も揺れ動く動点としてあるかぎり、世界地平は、たえず流動し

てやまないパースペクティヴをとるようになる。フッサールは、世界地平を内部地平と外部地平の両面において問題にするが、それによると、内部地平は事物のある側面を知覚によって現前することを、また、外部地平は事物を背景のうちで知覚することを指している。あらゆる事物のあらゆる側面が可能的には知覚されうるものとしてあり、それゆえ、可能的に知覚される経験的世界の全体が世界地平のうちに包括されようが、現実に対象となるのは、超越論的意識の指向性によって意味付与されたいくつかの事物のいくつかの側面に限られ、他は匿名的なものとして背景に退くのである。世界地平のうちで前景に出てくるのは、意味付与され、存在意味と存在妥当性をもつにいたるある事物のある側面に限られる。そのかぎりでは、超越論的主観との相関関係のうちで現われるフッサールの世界地平は、意味的世界とみなされよう。そのことは、『イデー』において、かなり明確に述べられている。そこで、フッサールは、「實在性の全体を存在の全体と同一視し、かくしてそれら自身を絶対化するのとは不合理 (Widersinn) である。絶対的實在性などというのは、まさに円い四角というようなものと同じだ

けの妥当性しかもたないのである」と述べて、唯物論に反対するとともに、「實在性や世界は……まさにある種の妥当する意味統一をあらわす名称である」ということ、この「意味統一は……意味を付与する意識を前提にしている」ということを主張した⁽¹⁷⁾。しかし、かれは、自分のこの立場が全世界を主観的仮象に変形する「パークレー的な観念論⁽¹⁸⁾」とは区別されるべきであることを、あわせて強調したのであった。フッサール自身が言うように、超越論的意識による意味統一を實在性とみなす現象学の立場がパークレーの主観的観念論から区別されうるにしても、それもまた、世界を意味的に把握する主観的観念論にほかならないといえるであろう。

生活世界も世界地平である以上、フッサールにとって、生活世界は、個人の目覚めた意識によって構成された意味的世界にほかならない。生活世界を意味的世界として捉えようとするところに、フッサールの生活世界論の基本的特徴があるように思われる。

さらに『危機』では、生活世界は、「相互主観的」世界であるということ、あるいは「相互主観的」に構成されたものとしての「意味形成物 (Sinngebilde)⁽¹⁹⁾」である

ということが前提されているが、何故そうであるかは基礎づけられてはいない。それというのも、すでにフッサールは、『デカルト的省察』において、「相互主観性」(Intersubjektivität)を基礎づけるために、「超越論的的自我」から出発して他我の演繹を試みており、『危機』でもそれを踏まえているからであろう。しかし、フッサールによる他我の演繹は、多くのフッサール研究者自身が認めているように、かならずしも成功しているとは思われない。その難点を抱え込んだまま、フッサールの「生活世界」の概念は、個人の意味的世界とみなされているとともに、「相互主観的」世界としても定立されているのである。

三 シュッツの日常的生活世界

フッサールの示唆した「生活世界の存在論」の課題を、現象学的社会学の方向で展開したのは、A・シュッツであった。もちろん、かれの最初の主著である『社会的世界の意味構成』(一九三三年)は、フッサールの『危機』に先立って執筆されており、そこでは、「生活世界」の概念はまだ用いられてはいない。だが、フッサールの

「自然的態度」や、「環境世界(Umwelt)」の概念に拠りながら、「日常的生活の世界」(die Welt des alltäglichen Lebens)の「主観的な意味構成」や、その視点からの社会的世界(Sozialwelt)の構造分析が問題にされているのである。

シュッツは、「ウェーバー社会学の現象学的分析」というサブタイトルのついたこの最初の主著において、「意味」概念を「主観的意味」と「客観的意味」とに区分した。「他者の行為の意味解釈」や、「判断する人の考え一般からも独立している」『アイデアの対象』としての表現」(S. 234)といった表現のことで、「意義(Bedeutung)」ともいわれる)が客観的意味といわれるのにたいして、主観的意味とは、行為者が自らの行為に付与する意味を指している。⁽²⁰⁾さらに、進行中の行為(Handeln)と行為の結果としての所為(Handlung)とを区別するシュッツは、他者の行為の産出物(所為)であっても、解釈者がその産出物の産出過程、すなわち他者の有意味的な行為を追体験しうる場合には、主観的な意味解釈が可能であるとみなすのである。

このように、シュッツは主観的意味と客観的意味とを

区別するが、かれが重視するのは、主観的意味の方である。日常的生活世界のうちで行為する個人が、その世界を主観的意味において構成すること、それがシュッツの現象学的社会学の主題であった。このような主題設定が、生活世界を意味的世界とみなすフッサールのモチーフを継承するものであることはいうまでもない。

さて、シュッツの日常的生活世界論を、かれの体系の骨格が提示されている「多元的現実について」の論文（一九四五年）を中心にみてみることにしよう。この論文で、かれは、世界を「独自の認知様式」をもつ限定された意味領域として多元的に捉え、日常的生活世界をも、夢の世界、芸術の世界、宗教的体験の世界、科学的観照の世界、狂気の世界などと並ぶ一つの世界（意味領域）として把握した。だが、日常的生活世界は、他の世界との比較において、至高の現実（Paramount reality）といわれる。そう言われるのは、日常的生活世界が「私の身体を含め、物理的諸事物からなる世界」あるいは「私の空間移動と身体的操作からなる世界」だからである。⁽²²⁾ 至高の現実ということをもって、日常的生活世界は、空間・時間的拡がりをもって客観的に存立するものとして

理解されている。それは、われわれが蓄積された手持ちの知識をもち、実際の関心をもって行為する舞台としての社会的世界にほかならないが、この世界を、シュッツはまたフッサールと同様、「相互主観的」世界とみなすのである。

日常的生活世界が「相互主観的」世界であるのは、それがたんに「私の私的世界ではなく、われわれのすべてに共通する世界であり」、そして、「この世界のうちでは、多様な社会的諸関係によって私が結びつけられている諸々の他者が存在している」からである。⁽²³⁾ だが、シュッツは、「相互主観的」世界の関係構造を、その総体において客観的に認識し、理論的に再構成するということを、あるいはその認識にもとづいて、社会的世界の関係構造のあり方を変革するということを意図してはいない。かれがおこなったのは、社会的世界を所与のものとして前提にしたうえで、私としての個人による社会的世界の意味的構成ということであった。

このような視点よりすれば、社会的世界は、私を中心とした世界として把握されようが、その場合には、「日常的生活世界の基本的な構造としての対面関係」(16)

「face to face relation」⁽²⁵⁾が分析の出発点にすえられることになる。私と他者との対面関係の世界とは、シュッツによれば、環境世界(Umwelt)にはかならない。それは、私にとってもっとも親密な世界なのである。この環境世界の外側には、同時代人の共時世界(Mitwelt)が開かれている。シュッツは、環境世界、共時世界とともに、意味構成可能な世界として過去と未来の世界を潜在的に含めて社会的世界の全体系とみなしているが、現実の社会的世界、すなわち日常生活世界は、どこまでも私としての個人によって到達可能な範囲にある世界に限定されている。

日常生活世界が私によって到達可能な範囲にある世界として措定されているかぎり、それは、私を中心(ゼロ点)にすえた「私の座標体系」⁽²⁶⁾とみなしえよう。私はつねにこの座標体系の中心(ゼロ点)において行為するのである。このゼロ点は、今と此処において表示されるが、今と此処における私の行為は、企図され、意図された行為あるかぎり、意味付与的なのであるし、行為の結果である所為も体験として反省されうるかぎり、主観的に有意義なものとなる。それゆえ、今と此処に

おける私の行為とその所為は、主観的に有意義であるとともに、私にとって固有のものである。なぜなら、私の今と此処というゼロ点は、私の生活史的状况によって規定されたレリヴァンス(relevance)の体系によって特徴づけられるからである。

「レリヴァンス」の概念は、シュッツの現象学的社会学にとって一つの鍵概念であるにもかかわらず、意味内容を正確に把握することの困難な概念でもある。⁽²⁷⁾シュッツ自身、「レリヴァンスとは、自然そのものにもともとそなわっているものではなく、自然のうちにいる人間の、あるいは自然を観察する人間の選択活動と解釈活動の結果である」⁽²⁸⁾、あるいは「本来のレリヴァンスはわれわれが選択した諸々の関心の結果である」⁽²⁹⁾と述べているように、レリヴァンスとは、個人としての私にかかわる客観的な関連性を意味するものではなく、私が行為において選択した主観的な関連性を意味するものといえよう。それは、私の生活史的状况によって規定されているとともに、自分自身、いづれ死ななければならぬという「根本的な不安」⁽³⁰⁾に条件づけられているのである。このように、過去と未来の両方向から制約されるレリヴァンスの

体系のうちで選択される私の行為は今と此処においておこなわれるが、それは、他者の行為と異なった私自身の固有のバースペクティヴをもつものとされる。なぜなら私の此処はけっして他者の此処とはならず、他者の其処でありつづけるからである。シュッツは、これをバースペクティヴの相異として特徴づけた。

しかし、かれは、このようなバースペクティヴの相違を主張するだけではなく、同時に、経験の類型化にもとづくバースペクティヴの相互性をも主張したのであった。

このバースペクティヴの相互性が可能となるのは、私と他者との「立場の相互交換可能性」と「レリヴァンスの体系の相応性」という二つの理念化によってであるとするが、シュッツにおいては、それらは論証されるべきものではなく、いずれも反証されるまで自明視されてよいものとして前提されているにすぎない。

もし、私と他者と同じような生活史的状况によって規定され、それゆえ、同じようなレリヴァンスの体系を共有しうるならば、他者もまた、私と同じような日常的生活世界を主観的に構成していると信じてよいのかもしれない。しかし、現実の社会において階級が存在し、個

人はかれの属する階級の相違によって利害をはなはだしく異にしている以上、私と他者とは別の階級に属しているとすれば、同様のレリヴァンスの体系を共有したり、立場を相互に交換するようなことは現実には不可能であろう。大富豪が飢えた貧民の身になって考えることがはたしてできるであろうか。生活史的に規定された両者のバースペクティヴの相違には、むしろ越えがたいものがあるというべきであろう。シュッツが階級的立場を無視ないしは過少評価するのも、個人から出発して、社会を主観的な意味において構成しようとするかれの方法論と不可分であるといわなければならない。

四 マルクスの生活世界

マルクスの唯物史観は、人間の生存が人間の歴史成立の根本条件であるということ、そのためには、物質的生産に媒介された衣食住の充足および他者の生産という物質的生活を社会的に営まなければならないということ、人間の生活はこの物質的生活を基礎にし、それに制約された社会的 (social) ・政治的・精神的生活を含む総体として成り立つものであるということから出発している。

唯物史観が、人間が生存し、生活するということから出発している以上、人間の生存・生活 (Leben) の総体を含む全領域としての「生活世界」の概念は、マルクスがたとえこの用語を使用していないにしても、かれの思想のうちに充分定位されるものといわなければならない。

生活を生活活動として把握したマルクスの場合には、「生活世界」の概念も、人間の生活活動との結びつきのなかで把握することができよう。この観点よりすれば、生活世界は人間の生活活動の及ぶ範囲として、人間の生活活動をとおして歴史的に形成され、歴史的に拡大されていく社会的現実そのものといふことができる。そして、このような「生活世界」の概念にあてはまるものは、マルクスにおいては、『ドイツデオロギー』において提起された「人々の現実的な生活過程 (Lebensprozess)」⁽³²⁾の概念にはかならない。

「生活過程」の概念が生活活動の過程である以上、それは、生活活動の諸前提、生活活動そのものおよび生活活動の所産を、生活活動を基軸にすえて把握したものといえよう。これら三契機のうち、生活活動そのものが主体的契機であるのたいして、生活活動の諸前提と所産

——所産はまた前提に転化する——とは客体的契機をなしており、両契機は、生活活動の主導のもとに、その過程において、すなわち客観的な生活過程において統一されてい

る。しかも、「人々の現実的な生活過程」が社会的 (sozial-schaftlich) にのみ成り立つものである以上、それは、社会的・生活過程として社会的現実そのものにはかならない。われわれの表象では、社会といつてよいかもしれない。社会的・生活過程は、物質的・社会的・政治的・精神的・生活過程の総体を包括するものであるが、ここでは、人間は、自らの生活活動をとおして、人間の自然にたいする関係と、人間相互の関係、それに人間が産出した「観念構成物」⁽³³⁾にたいする関係を取り結ぶ。これらの関係は、相互外在的な、分離した関係としてあるのではなく、生活活動においてその三契機として統一され、相互に媒介されるが、これらの関係のうちで不断に形成される総体としての社会的現実が、生活世界にほかならない。人間の生活活動とその所産が文化であるとすれば、生活世界はまた文化的世界であるともいえるであろう。

ところで、われわれが生きている社会的現実が、資本

主義的社會にほかならない。それが日本人としてのわれわれの生活世界なのである。この社会的現実を総体として科学的に認識するためには、その關係構造が分析される必要がある。そのために、マルクスは、社會を人間相互の社会的諸關係として捉えたうえでそれを分析して、物質的生產にかかわる生産諸關係を、その他の社会的諸關係——とりわけ、法的・政治的諸關係——を規定し、制約する基礎的な關係(土台)として取り出し、この土台とそれによって規定された社会的諸關係(上部構造)の全体とを社會構成体として把握したのである。それゆえ、「社會構成体」の概念は、生産諸關係を基底にすえた社会的諸關係のアスペクトから社会的現実を把握したものにほかならない。生活過程(生活世界)のうちで生起する諸々の出来事(Geschehen)は、生産諸關係によって形態規定されることによって、社会的諸關係のうちでその契機として、社会的な客觀的意義を獲得することになる。

そうした場合、社会的諸關係を土台と上部構造との統一として再把握した「社會構成体」の概念は、「生活過程」の概念から区別されうるであろう。もちろん、それ

ぞれの概念に対応する二つの現実があるわけではない。現実が存在するのは、ただ一つの総体としての社会的現実にはかならない。この社会的現実を、その総体においてそれとして把握するのが「生活過程」の概念である。この概念の意義は、社会的現実(生活世界)を、人間の生活活動の諸前提、生活活動そのものおよび生活活動の所産の総体として、活動の見地から把握したことにある。「生活過程」の概念によって、社会的現実(生活世界)を、もともと人間に対立する外的なものとしてではなく、人間によって不斷に産出されるものとして理解することが可能になるのである。それについて、「社會構成体」の概念は、異なった歴史的発展段階にある多様な社会的現実を、それぞれ世界史の基本的発展のうちで位置づけ、そのことによって歴史発展の合法性を説明したところに、その基本的意義があるといわねばならない。

五 個人の生活圏

フッサールやシュッツの生活世界論では、生活世界が他者とともに生きる「相互主觀的」世界であるとともに、個人の意味的世界とみなされていたが、二人とも、生活

世界の客観性の根拠づけに成功しているように思われ
ない。第一に、フッサールの『危機』の場合にも、シュ
ツツの場合にも、生活世界が「相互主観的」世界である
というのは、自明なものとして前提されているにすぎな
いし、たとえ根拠づけられたとしても、そのことは、た
だちに生活世界の客観性を意味するものとはいえない。
第二に、フッサールによる生活世界のアプリオリな普遍
的構造の析出は、生活世界が自我によって意味付与され
た意味的世界であるということを主張したものであって、
生活世界それ自身の客観性を語るものではない。第三に、
シュツツは、日常的生活世界を物理的抵抗の伴う世界
(至高の現実)として一応客観的に理解しながらも、も
っぱらそれの意味的構成を主題にしている。かれの場合、
日常的生活世界の意味的構成がパースペクティヴの相異
性によって根拠づけられるにしても、この世界の客観性
の問題とかかわりあうはずのパースペクティヴの相互性
の方は、論証ぬきに自明なものとして前提されているに
すぎない。

このように、フッサールもシュツツも、生活世界の意
味的構成を主題としながら、その前提として、生活世界

の客観性を論証しえていないのにたいして、マルクスの
生活世界は、まずもって、個人の意思から独立した客観
的世界として措定されている。もちろん、生活世界が個
人の意思から独立しているとしても、諸個人の諸活動か
ら独立しているわけではない。⁽¹⁷⁾生活世界が諸個人の生活
過程としてありながら、それ自身、個人の意思から独立
した客観的構造をもったものとして存立しているのであ
り、マルクスはその合法性を具体的に問うたのである。
この点を確認したうえで、生活世界の構成部分・分肢
としての個人の日常的生活過程をそれとして主題にす
ることもできよう。そのさい、個人の日常的生活過程
を生活世界から概念的に区別して、個人的生活圏 (Lebenskreis) と呼びうるとすれば、個人の生活圏は、当
の個人を中心にして拡がる生活空間として、かれの生活
活動の全領域を包含するものであり、諸個人の生活圏の
重層的な複合のうちに生活世界(社会的現実)が構成さ
れることになる。

個人の生活圏の概念は、まず第一に、存在論的、カテゴ
リイであり、それゆえ、時間・空間的に把握される必要
がある。個人の生活圏は、かれの日常的生活活動の領

域であり、したがって、一定の歴史的諸条件のもとにおける個人の生活の再生産過程（物質的生活と、それに制約されている社会的・政治的・精神的な生活）を包括するものであるが、その範囲は時間・空間的に条件づけられている。交通手段の発展が個人の生活圏を空間的に拡大するだけではなく、一定の空間的距離を時間的に縮めることにもなるように、生活圏はたんに空間的概念であるだけではなく、時間・空間的概念として把握されねばならない。生活圏の時間・空間的な拡大は個人の生活活動の拡大を意味するが、同時に、生活活動の拡大のなかで、個人の他の諸個人との交通（コミュニケーション）もまた拡大され、豊富化されるであろうし、そのなかで、個人の人格発展の新たな可能性もまた開かれることになる。⁽³⁸⁾

第二に、個人の「生活圏」の概念は、たんに存在論的概念であるだけではなく、価値的性質をもつものである。個人の生活活動がかれの要求や利害・関心にもとづいておこなわれる以上、生活活動の場としての生活圏が価値的性質をもつのは当然であろう。個人の生活関心は、一定の歴史的諸条件によって制約されているとともに、同

じ条件のもとでも、個人の生活史・気質・趣味などによっても相異なる。価値の多様性が語られるゆえんである。個人の多様な生活関心にもとづいて、かれの生活圏もまた、個性的・特殊なものとなる。個人の物質的・社会的・政治的・精神的活動は、調和のとれた同心円的なものではけっしてなく、客観的諸条件に制約されながらも、個人の生活関心に応じた凹凸のあるものとなるであろう。とくに、この凹凸は、自由時間の過ごし方においてもっとも顕著になる。Aが音楽を聞いている時に、Bは政治活動にかかりうるのである。このように、個人の生活圏の凹凸は、一定の歴史的諸条件によって制約されているとともに、かれの生活関心——それもまた、客観的諸条件によって規定されている——によって引き起されるものであることが注目されねばならない。

第三に、個人の「生活圏」の概念は、意味的性質をもっている。

「意味」概念は多義的であり、⁽³⁹⁾世界の意味、歴史の意味、生の意味などと言われる場合の「意味」概念は、「価値」と同類の概念とみなされる。だが、この場合でも、「意味」の概念は「価値」の概念と同義ではない。

対象の価値が何らかのかたちで主体にとっての有用性を反映しているの⁽⁴⁰⁾にたいして、意味は、主体が意識的にかわる対象のあるアスペクトを捉えたもの、それゆえ、意味付与活動によって構成されたものであるからである。価値が主体と客体との実在的連関のうちで措定されるとすれば、意味は、主体と客体との主観的連関のうちで措定されるものといえよう。もちろん、価値的なものは、多くの場合有意義的なものである。なぜなら、価値ある対象には、主体は意識的にかかわるからである。

世界の意味、歴史の意味を問うことは、主体が世界や歴史にどれだけ意識的にかかわるのかという、その根拠を問うことであり、それゆえ、意味を付与する主体の態度によって、世界の意味、歴史の意味も異なった内容をもつことになる。だからといって、意味がたんに主観的なものにすぎないというわけではない。フッサールは、世界を意味として捉え、世界の意味だけを問うの⁽⁴¹⁾にたいして、唯物論の立場は、世界の客観的認識との連関において、意味の問題を取り上げる。もちろん、客観的認識がそのまま意味を形成するのではない。個々の対象認識は、われわれが生きている社会的現実(生活世界)の連

関のなかに意義づけられて、客観的意義を獲得するのであり、そして、その意義が意味に変形されるのである。客観的意義の意味への変形の問題は錯綜した複雑な過程をとるが、ここでは、認識と意味とを連関する媒介項として、客観的意義の概念が必要不可欠であるということ⁽⁴²⁾を指摘するにとどめたい。

ところで、個人が意識的にかかわる意味的世界としての生活圏は、それ自体、客観的な生活世界の一部である。そうである以上、個人の生活圏は、生活世界の一部として、その全体的連関のなかで意義づけられる必要があるだろう。個人の有意義的な生活圏を、生活世界全体のうち⁽⁴³⁾に自覚的に意義づけながら形成することは、個人の日常的生活を私的領域に閉じ込めないためにも必要なことのように思われる。

(1) 日常的生活を諸個人の再生産として捉えたのは、A. ヘラーである。「日常的生活は、諸個人を再生産するためのかれらの諸々の活動の総体である」(A. Heller, *Das Alltagsleben*, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main, 1978, S. 24)。

(2) Marx・Engels, *Werke*, Bd. 3, Dietz Verlag, Berlin, S. 29. マルクス・エンゲルス『全集』第三巻、大月書店、二

四ページ。

(3) 近年、社会主義国においても、社会的意識論の視点から、あるいは認識論的視点から(理論的意識との対比のうちで)、¹⁾ 日常的意識についての研究が盛んになってきているが、ルーツは、社会と個人との関係という問題視角から日常的意識を論じた注目すべき論文のなかで、従来、日常的意識を理論的意識にたゞして「低い意識」とみなす傾向があったことに批判的言及している(W. Luntz, *Alltag und Alltagsbewußtsein*. In: *Deutsche Zeitschrift für Philosophie*, H. 4, 1985, S. 352)。なお、ルーツの論文にたゞしては、²⁾ ホーンによる批判がすでになされている(T. Hahn, *Um fassende Intensivierung—Inhalt sozialen Alltags und Alltagsbewußtsein?* In: *DZEPH*, H. 8, 1986)が、そのかぎりでは、概ね首肯できるものである。

(4) Marx・Engels, *Werke*, Bd. 25b, S. 838. 『全集』第二五巻b、一〇六三ページ。

(5) 拙稿「日常的意識と主体形成」、『唯物論』札幌唯物論研究会編、第二八号、一九八三年六月。

(6) マルクス主義を現象学的に改変する試みの一つに、ポール・ピッコネ「現象学的マルクス主義」(『資本のハラドックス』、粉川哲夫編訳、せりか書房、一九八一年、所収)がある。

(7) 種村完司氏も、マルクス主義と現象学との「建設的対

話」は、相互の「原理的批判」を媒介してのみ可能となることを主張している(『現象学とマルクス主義の対話によせて』、『唯物論研究年報』一九八六年版、唯物論研究協会編、白石書店)ので、参照されたい。

(8) フッサールの「生活世界」の多義性にかんしては、多くの論者が指摘しているところである。たとえば、ウ・クレスゲス「フッサールの〈生活世界〉概念に含まれる二義性」(『現象学の根本問題』、新田義弘・小川侃編、晃洋書房、一九七八年、所収)を参照。

(9) E. Husserl, *Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie*, *Husserliana*, Bd. 6, Martinus Nijhoff Vlg., Haag, 1954, S. 106. フッサール『ヨーロッパの危機と先験的現象学』(『世界の名著』、第五一卷所収)、細谷恒夫訳、中央公論社、一九七〇年、四七〇ページ。

(10) *Ibid.*, S. 176. 同上、五四八〜九ページ。

(11) 『危機』では、フッサールは人間をも「事物」に数え入れている(Vgl. *Ibid.*, S. 141. 同上、五〇八ページ参照)が、ここでは、一応区別して用いることにした。

(12) *Ibid.*, S. 130. 同上、四九五ページ。

(13) *Ibid.*, S. 134. 同上、四九九ページ。

(14) フッサール自身、この種のアポリアを「苦しい困難な」「謎」あるいは「逆説」として表現している(*Ibid.*, S. 134. 同上、五〇〇ページ)。

- (15) Ibid., S. 154. 同右、五二二ページ。
- (16) もちろんフッサール自身の思想的発展、思想的態度の変更をみておく必要はあるだろう。たとえば、『イデーオン』における自然的態度のエホケーにたいして、『危機』でエホケーされるのは客観的学問である。あるいは、『イデーオン』ではもっぱら指向的意識の能動性・自発性が強調されるが、『チカルトの省察』では、自我の能動的な働きの最低層として、自我の受動性(受容性)が注目されている、など。
- (17) E. Husserl, *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie*, Husserliana, Bd. 3, 1950, S. 134. フッサール『イデーオン』第一一巻、渡辺二郎訳、みすず書房、一九五九年、二八三〜九ページ。
- (18) Ibid. 同上、二二九ページ。
- (19) E. Husserl, *Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie*, S. 141. フッサール『危機』、五四二ページ。
- (20) A. シュッツ『社会的世界の意味構成』、佐藤嘉一訳、木鐸社、一九八四年、四五〜四九ページ参照。なお、シュッツは、社会的行為の意味性を主張したウェーバーを評価しながらも、ウェーバーにおいては、主観的意味と客観的意味とが区別されていないことを批判している。
- (21) A. Schutz, *Collected Papers 1*, Martinus Nijhoff Publishers, The Hague, 1962, p. 232. 『ハルンマン・シュッツ著作集』第二巻、渡部光・那須壽・西原和久訳、マルジ社、一九八五年、四一ページ。
- (22) Ibid., pp. 226—227. 同上、三四ページ。
- (23) Ibid., p. 218. 同上、二二三ページ。
- (24) シュッツが社会的世界を所与の秩序づけられたもの、今後も変わらないものとみなしている点で、しばしば、これの現象学的社会学の静態的・保守的性格が指摘されることにもなる(『新明正道』現代社会学の視角、恒星社厚生閣、一九七九年、一二七ページ参照)。
- (25) A. Schutz, *op. cit.*, p. 221. シュッツ、前掲書、二七ページ。
- (26) Ibid., p. 222. 同上、二九ページ。
- (27) 「レリヴァンス」概念の解釈が、シュッツ研究者によって微妙に異なっていることにかんしては、江原由美子『生活世界の社会学』、勁草書房、一九八五年、一一〜二ページを参照のこと。
- (28) A. Schutz, *op. cit.*, p. 5. 『アルフレッド・シュッツ著作集』第一巻、渡部光・那須壽・西原和久訳、マルジ社、一九八三年、五一二ページ。
- (29) A. Schutz, *Collected Papers 2*, 1964, p. 126.
- (30) A. Schutz, *Collected Papers 1*, p. 228. 『ハルンマン・シュッツ著作集』第二巻、三六三ページ。
- (31) Cf. *ibid.*, pp. 11—12. 『アルフレッド・シュッツ著作集』第一巻、六〇ページ参照。

- (32) Marx・Engels, Werke, Bd. 3, S. 26. 『全集』第三卷「二二ページ。なお、マルクスとエンゲルスの「生活過程」の概念を、史的唯物論の「全体性概念」として早く注目したのは、中野徹三氏である（「マルクス主義美学の根本問題」『思想』第四二六号、一九五九年一月）。
- (33) Marx・Engels, Werke, Bd. 3, S. 38. 『全集』第三卷「三四ページ。「観念構成物」が何らかの物的なものに担われている以上、それはまた記号に表現された意味構成物でもある。
- (34) 「社会は諸個人からなっているのではなく、これらの諸個人がおたがいにわかりあっている諸関連、諸関係の総和を表現している」(K. Marx, Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie, Dietz Vlg., Berlin, 1953, S. 176. マルクス『経済学批判要綱』II、高木幸二郎訳、大月書店、一九五九年、一八六ページ)。
- (35) マルクスは、多くの場合、「経済的社会構成体」の概念を用いている。また「社会構成体」と「経済的社会構成体」の概念の異同にかんして、従来、「社会構成体」論争のなかで論じられてきたが、ここでは、その点には立ち入らないことにする。
- (36) 富沢賢治氏は、「人間社会は、……①諸個人の現実的な生活過程の総体としての社会と、②それを土台・上部構造として構造的に再把握した社会構成体、という二つの位相にわけて考察することが可能となる」と指摘されている（『労働と生活』、世界書院、一九八七年、二二ページ）が、ここでは、概ね氏の理解に拠っている。
- (37) 活動そのものと活動の所産とは、概念的に区別される必要がある。活動は個人の意思から独立してはいないけれども、活動の所産は個人の意思から独立している。また、活動とその所産とは実際に区別される場合と、活動の過程がそれ自身所産となる場合とがある。前者の例として、生産活動とその所産（生産物）があげられるし、後者の例として、演劇活動や社会的行為があげられる。
- (38) マルクスは、「時間が諸々の能力を発展させるための空間である」(Werke, Bd. 26 III, S. 252. 『全集』第二六卷III「三三六ページ」として捉えている)。
- (39) 言語を含め、記号の表現する意味にかんしては、記号が指示する内容が意味といわれるし、さらに一般的にいて、表現の意味にかんしては、表現されたものは、表現するものにとつての意味を有するといえよう。
- (40) 「価値」概念が主体の有用性を反映しているとしても、多くの場合、価値は純化され、理想化され、規範化されている。この点にかんしては、高田純「価値論の基礎的諸問題」(岩崎允胤編『価値と人間的自由』、文芸社、一九七九年、一〇～六五ページ)を参照のこと。